金沢に伝わる照手姫伝説

金沢には、600年以上前の照手姫（てるてひめ）の伝説が残っています。姫は京都御所の北面武士の娘でしたが、わけあって芸姑となり藤沢の盗賊の首領、横山大膳の宿屋で働いていました。

横山大膳は、関東管領の足利持氏に謀反の嫌疑をかけられて逃れてきた小栗判官（おぐりはんがん）を殺害する計画を企てていました。これを耳にした照手姫は判官に伝えました。照手姫から知らされた判官は、宴席で毒入り酒を一口だけ飲み、息が途絶えたよう振るまいました。それを知らない従者は杯を飲み干し全員息絶えました。横山大膳は判官主従の全員が死んだものと思い、藤沢の遊行寺の裏山に捨て置きました。遊行寺の僧に観世音から「判官主従を救え」というお告げがあり、弟子たちを使わせてみると、従者は全員息絶えていましたが、ただ一人温もりのあった小栗判官だけが助け出され、一命をとりとめました。

一方の照手姫は、追われる身となり、六浦まで逃げ延びましたが追っ手に捕えられ、川の千光寺の前の「油堤（あぶらつづみ）」という所から川の中へ投げ込まれました。姫は日頃から深く信仰していた観音経を一心に唱えて奇跡的に野島の漁師に助けられましたが、あまりにも美しい姫を見た漁師の妻が嫉妬して、姫小島の青松葉で燻し殺されかけました。ここでも観音経を一心に念じ、無事に難を逃れましたが美濃国の遊女に売られてしまいました。燻し松があった場所は、現在は埋め立てられていますが、瀬戸橋の北側の金沢図書館の近くに姫小島として史跡が残っています。

その後、七色に輝く熊野の温泉の霊力で判官の病も癒え、謀反の疑いも晴れ、藤沢の遊行寺で横山大膳を討ち、ようやく美濃国で照手姫を探しあてました。念願かなって照手姫を妻に迎え、幸せに暮らしたという伝説です。

照手姫の乳母の侍従が姫を探したおりに、姫が行方知らずになったことを悲しみ、鬢付け油が入った化粧道具を堤に残して、千光寺の前の川に身を投げたことから、身を投げた場所が「油堤」、この川が「侍従川」と呼ばれるようになりました。千光寺は、東朝比奈に移りましたが、数百年たった今でも照手姫の「身代り観音」が大切に祀られています。（廣瀬隆夫）